

中学校教師の生徒への関わり方の変容に関する一考察
－ 問題行動への取り組みを通して －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
藤田 瑞紀

本研究では、生徒の問題行動への取り組みを通して、中学校教師の生徒への関わり方の変容プロセスを明らかにすることを目的とした。そして、そのプロセスに影響を与える要因について検討した。教職経験 25 年以上の中学校教師 5 名を対象に半構造化インタビューを行った。5 名それぞれを事例検討した結果、変容の仕方には三つの特徴が見られた。一つは、これまでの関わり方を修正する方向性の転換、二つには、様々な視点での関わり方を身につける関わりの重層化、三つには、ある一定の視点に沿った関わり方がより具体化される質の変容である。変容の契機は問題行動への取り組みだけでなく、家庭環境の変化や同和地区出身生徒の話などが得られ、個別性があった。変容に影響を与えた人物としては同僚、生徒、家族があげられ、教師自身がこれらの人を手本にすることやこれらの人によって支えられることで変容がもたらされることが示された。

生徒への関わり方に変容が見られたものの、語りの中で自身の変容を認識していない対象者もいたことから、変容が無意識・無自覚に生じる可能性が示唆された。そこには、与えられた役割を抱え込むことにより、視野の偏狭性や生徒への関わり方に偏りが生じることが窺えた。そのため、自身の身の回りに生じた出来事を振り返り、自分自身を捉え直すことの重要性や他者に助けを求める援助要請行動の必要性が示唆された。